

# 終助詞の音調と意味の対応について

——日本語母語話者及び留学生への聴き取り調査より——

轟 木 靖 子      山 下 直 子

## 1. 研究の目的

日本語の話し言葉においては、文末表現やそれにもなう音調がコミュニケーションをはかるうえで重要な役割を担っている。轟木(1993)では東京語の文末詞(終助詞類)について、音調と意味・機能の対応関係について内省にしがたい整理した。轟木(2004)では、東京語話者に対しておこなった文末詞の音調についての聞き取り調査と同じものを岡山、広島、香川で生育した男女13名に実施し、比較・考察した。これは、東京でおこなわれている文末詞の音調と意味・機能の対応関係が、東京以外の地域でどの程度共通に理解されるかを調査し、日本各地に共通語として理解されるような終助詞の音調を明らかにすることを目的としたものである。

今回は、香川大学で学ぶ外国人留学生(以下、「留学生」とする)に同じ調査をおこない、その結果を日本語母語話者の結果と比較し、考察した。これは、将来的に日本語教育教材開発のための基礎研究資料とすることを旨とするものである。

## 2. 終助詞の音調の記述方法

郡(1990)では、大阪語の文末詞「か」の音調を、前形式に対する接続の仕方と文末詞自体の拍内の音調の二つの要素によって記述・整理している。本研究でも同様の方法を取る。前形式への接続の仕方は、和田(1969)で述べられている助辞接辞のアクセントの概念が基礎となっている。東京語の場合、前接の語句への接続のしかたは順接と低接の2種類が考えられる。

順接とは、前接の語句のアクセント型に従ってそのまま接続するものであり、無核の場合は高い拍にそのままつき(例:モモ+ヨ→モモヨ)、有核の場合、尾高型の場合はアクセント核に従って低い拍として接続し、頭高型、中高型の場合は低い拍にそのままつく(例:イヌ'+ヨ→イヌヨ、ア'+メ+ヨ→アメヨ)。低接とは、前接の語句のアクセント型にかかわらず、常に低く接続するつきかたである。(例:モモ+ヨ→モモヨ、イヌ'+ヨ→イヌヨ、ア'+メ+ヨ→アメヨ)。

東京語の場合、文末詞拍内の音調は、平坦、上昇、下降、上昇下降の4種類が考えられるが、上昇には疑問文の末尾に見られるような上昇と、アクセントの低から高へ変化するときのような上昇の2種類が認められる。

疑問文末尾に見られる上昇音調は、一般的に「上昇」と呼ぶときにもっともイメージしやすい音調と思われる。「桃?」「雨?」のように、名詞一語文で問い返す発話の末尾にもあらわれ、終助詞を伴わない発話において、聞き手への問いかけの機能を担う音調であると考えられる。しかし、終助詞が伴う発話においては、かならずしも同じ機能を担うとはいえない。終助詞の形態的意味が影響するからである。

アクセントの低から高への上昇音調は、たとえば、「これ何て書いてあるの?」と尋ねられたときに「桃。」「雨。」と答えたが、「えっ、何?」と聞き返されて、強い調子で「もも!」「あめ!」

表1 東京語の文末詞の音調

	前形式				順接					低接					備考
	動詞	形容詞	名詞	名詞+タ	平坦	疑上昇	ア上昇	下降	上下	平坦	疑上昇	ア上昇	下降	上下	
よ1	○	○		○		○			○		○			○	
よ2	わよ	わよ	○			○			○						女性語；V,Aには「わよ」
ぜ	○	○		○		○					○				男性語
ぞ	○	○		○		○					○				男性語
わ	○	○		○							○				疑問上昇は女性語
さ	○	○	○			○									
ね1	○	○		○		○			○						
ね2	わね	わね	○			○			○						女性語；V,Aには「わね」
な1	○	○		○	○				○						
な2	○	○		○		○									
な3	終止形				○										禁止
な4	連用形					○									命令
の	○	○		名詞+ナ							○	○	○		
か1	○	○	○		○	○			○						V終止形（尾高型）に接続
か2	○					○			(○)						V連体形（平板型）に接続
って1	○	○		○										(○)	
って2	○	○		○							○	○	○		
っけ	○	○		○								○			

○は、その音調が使われていることを示す。複数の音調が一つの欄になっている部分は、それらの音調が機能のうえで区別されないで使われていることをあらわす。Vは動詞を、Aは形容詞をあらわす。

と答えるときの末尾にもあらわれる。この上昇調は、このように文末詞を伴わない発話の末尾において用いられると、聞き手には強い口調としてとらえられ、話し手の主張の強さ、あるいは聞き手への訴えかけの強さなどの機能を担うと考えられる。しかし、これも、終助詞をともなった発話では、かならずしも同じ機能を担うとはかぎらない。また、先の疑問文末尾の上昇音調とほとんど区別されずに使われる場合もある。

ここでは、疑問文末尾に見られるような上昇音調を「疑問上昇」、アクセントの低から高へ変化するときに見られるような上昇音調を「アクセント上昇」と呼ぶ。

この二つの上昇音調の区別は、吉沢（1960）の「昇調1」「昇調2」、川上（1963）の「第一種」「第四種」、上村（1989）の「のほり音調」「つよめ音調」の区別にはほぼ相当する（注1）。

結果として、2種類のアクセント×5種類の拍内音調=10種類が理論的には想定できることになるが、実際には、多くの文末詞はこの10種類の音調の一部を取り、その中で意味・機能が区別される。これについては轟木（1993）で内省をもとに整理を行ったが、一部修正を加えたものを表1に示す。なお、轟木の生育地は中学2年生まで東京都世田谷区であり、以下「内省」とは轟木の内省である。

### 3. 共通語としての終助詞の音調

共通語は、日本全国各地で通じる言葉であるが、かなりの部分は東京語が基本になっていると考えられる。終助詞について考える場合、例えば「ね」と「よ」の語彙的な違いによる差は文法研究の分野でも多くなされており、一部には音調による違いを取り入れたものもあるが、基本的には文法論の立場からの分析が中心である。

各地の方言で使われている文末詞の音調については、藤原（1982、1985、1986）を始めとしておこなわれているが、文末詞の取りうる音調を音韻的に整理し、そのうえで意味・機能との対応関係

を分析したものは、郡 (1990)、村中・郡 (1990)、轟木 (1993) など一部に限られている (注2)。

文末詞の音調は、東京語の場合、内省では、たとえば「行くよ」の「よ」は、疑問上昇かアクセント上昇のどちらで言っても、使われる場面や文脈にあまり差はないように思われる。つまり、この二つの音調は意味・機能に差を生じさせるほどの差ではないと考えられる。しかし、「の」の場合、「行くの」の「の」を疑問上昇で言えば、行くかどうかを相手に尋ねる発話となり、アクセント上昇で言えば、自分は絶対行くのだと主張する発話となる。つまり、「の」の2種類の上昇音調は、音調と意味・機能の対応という面から見れば、「よ」に見られたような音声的なバリエーションではなく、音素的なものであると考えられる。

今回は、形態としては全国で使われている、あるいは理解されていると思われる「よ」「ね」「な」「か」についての音調と意味・機能の対応が、岡山、広島、香川で言語形成期を過ぎた日本語母語話者にどの程度共有されているか、また、香川で生活している留学生がどのように理解しているかを調査し、比較・考察をおこなう。

なお、東京語という、地域の言葉としての「よ」「ね」「な」等は「文末詞」、共通語として考える場合は「終助詞」と呼ぶことにする。

#### 4. 「よ」「ね」「な」「か」の聞き取り調査

##### 4. 1 調査の方法および内容

「やるね」「桃だよ」のように、短い語句に「よ」「ね」をつけた文の終助詞の部分複数の音調で読んだテープを聞いてもらい (不自然にならない程度に前接の語句の部分の音調の高さがあまり変わらないよう注意して読んだものを用いた)、各発話について、提示された設定での発話としてふさわしいと思ったら○をつけてもらった。その場合、自分が使わなくてもそのように聞こえれば○をつけ、複数○をつけても、あるいは一つも○がつかなくてもかまわないことを伝えた。調査した文、終助詞の音調、設定の内容は以下のとおりである。Lは低接をあらわし、Lがついていないものは順接であることをあらわす。調査テープでの順序はここに示したとおりではない。調査時間は20分程度であった。「桃だよ」の全音声および「やるよ」の低接上昇下降のF0曲線を図1から図9に示す。岡山、広島、香川での調査は2003年12月から2004年2月の間に実施した。

- (1) 「桃だよ」 平坦、疑上昇、ア上昇、下降、上昇下降、L平坦、L疑上昇、Lア上昇
  - (a) 「あれ、何？」と尋ねた友人に教えるつもりで言うとき。
  - (b) 「あれは梅だ」という友人に、「あれは梅ではなく桃だ」と言うとき。
- (2) 「やるよ」 平坦、疑上昇、下降、上昇下降、L平坦、L疑上昇、L上昇下降
  - (a) 「誰かこの仕事をやってくれる人はいませんか」と言われて、「私がやります」と答えるつもりで言うとき。
  - (b) いつまでもぐずぐずして、なかなか重い腰をあげようとしない仕事仲間に、「早くやろう」とうながすつもりで言うとき。
  - (c) 第三者のことについて話をしている、「あいつは口先ばかりで何もしない」という相手に、「そんなことはない、あいつはやるときにはやる」と言うつもりで言うとき。
  - (d) 「早く仕事をやれ」と何度もせきたてられて、「うるさいなあ、ちゃんとやるよ」と文句を言うとき。

- (3) 「やるね」 平坦、疑上昇、下降、上昇下降、L平坦、L疑上昇  
 (a) 「私が今からやるね」と相手に言うとき。  
 (b) 「ちゃんと約束どおりやるね」と相手に念を押すとき。  
 (c) 「あいつ、なかなかやるね」と感心して言うとき。
- (4) 「本当だね」 平坦、疑上昇、ア上昇、下降、上昇下降、L平坦、L疑上昇、Lア上昇  
 (a) 相手の話をひとつおき聞いて、最後に、「今の話、本当だね」と確認するとき。  
 (b) 相手の話に同意して、「本当だね。確かにそのとおりだ」と言うとき。  
 (c) 自分の話を信用しない相手に、「いいや、うそじゃないもん。本当だね」と言うとき。
- (5) 「先輩だな」 平坦、疑上昇、ア上昇、下降、上昇下降、L平坦、L疑上昇、Lア上昇  
 (a) 「あの人が、君の先輩だな」と、確認するとき。
- (6) 「心配だな」 平坦、疑上昇、ア上昇、下降、上昇下降、L平坦、L疑上昇、Lア上昇  
 (a) 自分が受けた試験の結果が気になって、ひとり言のように言うとき。  
 (b) 後輩のことが気になって、「あいつ、なんだか心配だな」と自分の同期の仲間に言うとき。
- (7) 「桃か」 平坦、疑上昇、L平坦、L疑上昇  
 (a) 桃の花を初めて見て、「ふーん、これが桃か」と言うとき。  
 (b) どう見ても桃の花に見えないものを「桃だ」と言われて信じられず、「これが本当に桃か」と尋ねるとき。
- (8) 「やるか」 平坦、疑上昇、L平坦、L疑上昇  
 (a) 「じゃあ、そろそろやるか」と言って自分で仕事を始めるとき。  
 (b) 「じゃあ、そろそろやるか」と言って仲間に声をかけて仕事を始めるとき。  
 (c) 知り合いが守銭奴のようになって稼いでいるという話を聞いて、「へえー、彼もそこまでやるか」と言うとき。  
 (d) 知り合いが万引きで捕まったという話を聞き、信じられず、「あの人がそんなことやるか」と、その話を知らせた相手に言うとき。  
 (e) 面倒な仕事を押しつけられて、「誰がこんなことやるか」と言うとき。

#### 4. 2 被調査者

被調査者は、言語形成期を岡山、広島、香川のいずれかの場所一個所で過ごした20代から30代の男女13名、および、香川大学で学ぶ20代から40代の留学生13名（中国11名、韓国2名）である。留学生は、全学共通科目の上級日本語クラスで日本語・日本事情科目を履修している者（日本語能力試験1級合格程度）である。

また、この調査は、轟木（1994）での東京語話者に対する調査を改良したものである。轟木（1994）で調査対象となった東京語話者は、言語形成期を東京都内で過ごした20代から70代までの男女18名であるが、「よ」については9名に対してのみおこなっている。

#### 4. 3 留学生に対する質問項目

留学生に対する調査では、日本語学習歴、日本滞在歴のほか、終助詞についての学習経験等につ

いての質問を加えた。内容は以下のとおりである。

#### 聞き取り調査の前の質問

- (1) 終助詞の使い方、たとえば「ね」と「よ」の違いなどについて、これまで勉強したり、話を聞いたりしたことがあるか

はい or いいえ のどちらか一つに○

- (2) 終助詞の音調（イントネーション）の違い、たとえば上昇調の「よ↑」と下降調の「よ↓」の違いについて、これまで勉強したり、話を聞いたりしたことがあるか

はい or いいえ のどちらか一つに○

- (3) ふだん、日本語の文末の音調（イントネーション）の違いを聞き分けているか

かなり聞き分けている、少し聞き分けている、まったく聞き分けていないの中から一つに○

#### 聞き取り調査の後の質問（アからエの中から一つを選ぶ）

・この調査をやってみて、

ア. 文末の音の違いも聞き取れたし、意味の違いもだいたいわかった

イ. 文末の音の違いは聞き取れたが、意味の違いはよく知らないので答えられなかった。

ウ. 文末の音の違いは聞き取れなかったが、意味の違いはだいたい予測できた。

エ. 文末の音の違いも意味の違いもどちらもわからなかった。

#### 4. 4 調査結果

今回の調査結果および轟木（1994）での調査結果を発話文ごとにまとめたものを表2-1から表5-2に示す。○がついているところは、回答者がその設定での発話としてふさわしいと判断していることを示す。

#### 5. 考察

##### 5. 1 日本語母語話者の回答についての分析

##### 5. 1. 1 「よ」

「よ」は聞き手にとっての新情報を含むような情報伝達のほか、動詞終止形については聞き手の行動をうながすような意味を持つ場合がある。内省では、「よ」は順接、低接の両方を取り、聞き手に対する応答の場合、単に答える場合は順接の平坦、疑問上昇、アクセント上昇のいずれでもよく、低接平坦の場合は聞き手との意見の食い違いが強調されているように聞こえ、順接下降や順接上昇下降では聞き手に対する不満がより強くあらわれている発話に聞こえる。

しかし、今回の調査結果では、「桃だよ」を(a)友人に教えるつもりで、と(b)「あれは梅ではなくて桃だ」と言うとき、を比べた場合、順接平坦と低接平坦の比率を見ると、東京では(a)の設定では二つの音調を選んだ数に差はなく、(b)の設定では低接平坦が若干増える程度である。いっぽう、香川、岡山、広島では、(b)の順接平坦はあまり選ばれていない（表2-1）。

「やるよ」の(b)仲間に「早くやろう」とうながすつもりで、については、東京、香川では順接平坦または順接疑問上昇をほぼ全員が選択しているのに対して、岡山・広島ではやや少ないようである。広島の1名と岡山の1名からは、調査終了後、この設問が答えにくかったというコメントがあった。したがって、この用法には地域差が認められると予測される（表2-2-1）。

「やるよ」の(d)「うるさいなあ、ちゃんとやるよ」はほとんどの回答者が低接平坦、順接下降、

順接上昇下降を選んでおり、聞き手に対する反発を示す音調として共通に理解されていると思われる。また、東京ではあまり選ばれていない低接上昇下降が香川および岡山、広島でほとんどの回答者が○をつけているところに差がみられる(表2-2-2)。

### 5. 1. 2 「ね」

「ね」は聞き手と情報を共有していることが前提となり、確認要求、同意要求、情報伝達などの機能を持つ。内省では「ね」は順接のみであり、確認要求では疑問上昇かアクセント上昇、同意要求では下降か上昇下降、情報伝達では平坦、疑問上昇、アクセント上昇の音調が用いられる。確認要求の疑問上昇とアクセント上昇の使い分けは、厳密には、聞き手に尋ねる意味が含まれれば疑問上昇が、ほとんど聞き手に有無を言わせないような発話ではアクセント上昇であると考えが、実際にはあまり差がなく使われているようにも思われる。

調査の結果では、「やるね」の(b)「ちゃんと約束どおりやるね」と念を押すとき、では、順接の疑問上昇と平坦がほとんどの回答者に選択されていた。地域差があったのは、東京、香川であまり数が多くない低接疑問上昇が、岡山・広島で5名中4名がふさわしいと答えている点であるが、同様の確認要求「本当だね」の(a)「今の話、本当だね」と確認するとき、で同じ音調を選んでいるのは5名中2名で、この点はまだ調べる必要がある。

「ね」の同意要求は、感情の表出をとまなうことが多く、下降または上昇下降音調が用いられると考えられる(「あいつ、なかなかやるね」)。「本当だね」の(b)相手の話に同意して「本当だね。確かにそのとおりだ」と言うときは同意要求というよりは同意の表明であるが、同様に下降および上昇下降が多くの回答者に選択された。この設定で、順接平坦は、東京では約半数の回答者がふさわしいと答えているが、香川、岡山、広島ではほとんどの回答者がふさわしいと答えており、やや差がみられる(表3-1、表3-2)。

### 5. 1. 3 「な」

「な」は内省では順接のみであり、下降あるいは上昇下降で感情表出の意味をあらわし、ひとりごとのように、聞き手がない場合でも用いられる。「ね」の同意要求も下降や上昇下降で発話される場合は感情表出の機能を持ち、また、「な」も男性語の場合、感情の表出のみではなく聞き手への同意を求めたり、アクセント上昇では確認要求の意味をあらわすこともある。

「心配だな」の(a)自分の受けた試験の結果が気になってひとりごとのように言うとき、と、(b)「あいつ、なんだか心配だな」と仲間に言うとき、の下降と上昇下降の数を比べると、東京では(a)では16:12、(b)では11:15で、上昇下降音調のほうが聞き手がいる発話では用いられやすいようであるが、香川、岡山、広島ではどちらも全員が選んでいた。しかし、これは調査人数の差が影響している可能性がある(表4-2)。

地域差があったのは、「あの人が君の先輩だな」と確認するとき、の設定で、香川で8名中6名が低接疑問上昇を選んでいる点である。先に述べた「やるね」の確認要求で、低接疑問上昇が岡山・広島で比較的選ばれていた点とあわせて、「ね」「な」の低接疑問上昇音調については今後さらに詳しく調べる必要がありそうである(表4-1)。

### 5. 1. 4 「か」

「か」は内省では、名詞にはそのままつき、動詞には音声的には低くつくが、(轟木(1995))では終助詞のアクセント全体で考えると、動詞終止形が尾高型で、「か」はそれにしたがって低くつくと考え、「か」は順接であると分析した。その結果、モモ+カ→モモカ、ヤル'+カ→ヤルカと

なる。しかし、音声的なイメージがわきにくいので、ここでは $\overline{\text{モモカ}}$ 、 $\overline{\text{ヤルカ}}$ を順接、 $\underline{\text{モモカ}}$ 、 $\underline{\text{ヤルカ}}$ を低接として扱うこととする。これにしたがうと、内省では、「か」は名詞には順接、動詞終止形には低接で、疑問上昇で質問をあらわすほか、平坦では言い切りのやわらげ、および反問をあらわす機能があると考えられる。また、東京語で一般的かどうか不明だが、 $\overline{\text{イクカ}}$ のような音調は聞き手への呼びかけをあらわす場合もある。

調査結果からは、「やるか」の(b)仲間に声をかけて仕事を始めるとき、に順接平坦、順接疑問上昇を選んだ回答者は、東京では18名中それぞれ6名、10名であるが、香川では8名中5名、8名、岡山・広島では5名中2名、3名と若干差があった。この順接疑問上昇音調は、「やるか」の(d)「あの人がそんなことやるか」と聞き手に対して言うという設定でも、香川、岡山、広島ではほとんどの回答者に選ばれているのに対し、東京では18名中11名である。同じ「やるか」でも、(a)自分で仕事を始めるとき、(e)「誰がこんなことやるか」と言うとき、は、共通して低接平坦が選ばれていた(表5-2)。

「桃か」については、香川、岡山、広島で低接がかなり選ばれていた点が東京と大きく異なっている。「ふーん、これが桃か」は低接平坦を香川では8名中7名が、岡山・広島では5名中3名が○をつけており、東京の18名中4名との差は大きい。「これが本当に桃か?」と尋ねるとき、でも香川、岡山、広島で低接疑問上昇をほとんどの回答者が選んでいるのに対し、東京では18名中5名である。ただし、どちらの場合も香川、岡山、広島では順接音調も同程度選ばれており、完全に東京と異なるとはいえず、東京では許容度の低い名詞+低接のカが今回調査した地域では聞いて違和感がない音調として存在すると考えられる(表5-1)。

### 5. 1. 5 香川、岡山、広島における低接音調について

今回の調査では、香川、岡山、広島において、東京ではあまり許容されない名詞に接続する低接平坦の「か」、および「ね」「な」の低接疑問上昇が比較的多く選ばれていた。これは、この地域でこれらの文末詞・終助詞が低接である可能性が高い(注3)ことが大きく影響していると考えられる。これは、たとえば香川の場合、「な」はふだん使用する文末詞であっても「ね」は、人によってはややあらたまって共通語で話すときしか使われにくいといった事情もあり、同じレベルで考えることは難しいが、これらの終助詞をつけた一語文を読む場合は低接になるようである。

したがって、音声を聞いた場合、それが「共通語として」なのか「方言として」なのかはあいまいであったとしても、「そのように聞こえるかどうか」という判断においてはテレビなどで見聞きする共通語の音声と、この地域での終助詞のアクセントにしたがった低接の音調の両方を許容していると考えられる。

## 5. 2 留学生の回答についての分析

### 5. 2. 1 「よ」

「桃だよ」の(a)友人に教えるつもりで、は、留学生の回答は順接の疑問上昇とアクセント上昇がともに半数を超え最も多い(13名中7名)。この点は共通するが、日本語母語話者では、ほかに順接と低接の平坦もかなり選ばれているが、これらの音調は留学生にはあまり選ばれていない。(b)「あれは梅でなくて桃だよ」も、(a)と同様、順接・低接の平坦が少ない(表2-1)。

「やるよ」の(b)仲間に「早くやろう」とうながすつもりで、は、全体を通して最も日本語母語話者と対照的な回答だった。日本語母語話者に多く選ばれている順接の平坦はゼロ、疑問上昇は13名中3名と少なく、下降と上昇下降が7名と半数を超える。さらに、順接の疑問上昇を選んでいる回答者も下降か上昇下降のどちらかを選択している。この「やるよ」(b)に関しては、コミュニ

ケーションの際に問題が起こることも予想される(表2-2-1)。

その他の「やるよ」に関しては、(a)の「私がやります」と答えるつもりで、は、順接と低接の平坦がそれぞれ半数を超え比較的多いことは日本語母語話者と共通しているが、順接疑問上昇はそれほど多くない。(c)の「そんなことはない、あいつはやるときにはやるよ」は、順接疑問上昇と低接平坦を半数程度が選択しており比較的多く(6名、7名)、これは日本語母語話者と共通するが、順接平坦は13名中3名と少ない。また、ここでは、香川・岡山に比較的多かった順接下降音調はほとんど選ばれていない。(d)の「うるさいな、ちゃんとやるよ」は、日本語母語話者の回答傾向とほぼ同様である(表2-2-2)。

### 5. 2. 2 「ね」

「やるね」の(a)「私が今からやるね」では順接平坦の回答(9名)、(b)「ちゃんと約束どおりやるね」と念を押すとき、では、順接疑問上昇の回答(9名)が比較的多いが、日本語母語話者ほど比率は高くない。いっぽう、低接疑問上昇がそれぞれ13名中4名、6名に選ばれているのは、地域の影響かもしれない。

(c)「あいつなかなかやるね」は、順接の下降が13名中10名、上昇下降が7名と半数以上選ばれているが、平坦はほとんど選ばれていないのが目立つ。この傾向は、以下の「ね」でもみられ、留学生にとって、全般的に順接平坦の「ね」はなじみにくいのではないかと思われる(表3-1)。

「本当だね」の(a)「今の話、本当だね」と確認するとき、は、先の「やるね」と同様、順接平坦はあまり選ばれていない。順接アクセント上昇の選択が最も多いが(9名)、日本語母語話者がほかにも順接の疑問上昇や平坦を多く選んでいるのに対して、同様の音調を選んだ留学生回答者は半分以下である。そのいっぽうで、順接の上昇下降は7名、下降は5名の回答者が選び、そのほとんどが、同じ音調を(b)でも選んでいる。

(b)の相手の話に同意して「本当だね。確かにそのとおりだ」と言うとき、は、順接の下降と上昇下降は日本語母語話者と同様に多く選ばれているが(9名)、順接の平坦とアクセント上昇はあまり選ばれておらず、特に平坦は少ない。

(c)自分の話を信用しない相手に「うそじゃないもん、本当だね」と言うとき、は、選択者が半数を超える音調はなかったが、日本語母語話者の結果と同様に、順接平坦の選択数は比較的多かった(6名)。いっぽう、順接アクセント上昇も6名が選択した点は、日本語母語話者とは異なる(表3-2)。

### 5. 2. 3 「な」

「先輩だな」の(a)「あの人が君の先輩だな」と確認するとき、も、「ね」と同様、順接平坦を選んでいるのは1名のみと少ない。順接アクセント上昇がかなり多く(9名)、この点は日本語母語話者の回答ともほぼ一致する。しかし、順接疑問上昇は13名中5名と半分以下である。この用法に関して、日本語母語話者は二つの上昇音調をあまり区分していないが、留学生の場合は違う音調としてとらえていると思われる(表4-1)。

(a)ひとりごとのように言う「心配だな」は、順接の下降は10名と日本語母語話者と同様に多いが、上昇下降は4名とそれほどでもない。日本語母語話者にあまり選ばれていない低接平坦を選んでいる回答者は2名のみだが、その2名も順接下降にも○をつけているので、特に、日本語母語話者と異なる反応とはいえない。

(b)同期の仲間と言う「心配だな」は、(a)に比べて順接上昇下降が多い(8名)。このことから、「な」の順接上昇下降は、日本語母語話者にひとりごとの音調としてありそうでも、留学生にとっ



てはかならずしもそのように聞こえないといえそうである(表4-2)。

#### 5. 2. 4 「か」

(a)自分で仕事を始める「やるか」と、(b)仲間に声をかける「やるか」は日本語母語話者と同じような回答傾向である。

(c)から(e)では、選択者が半数を超える音調はなく、特に、(d)(e)は回答にばらつきが見られたが、これらがなじみの薄い「か」の用法であるためかもしれない。

(c)「彼もそこまでやるか」は、日本語母語話者に比較的多かった低接平坦を選んでいるのは1名のみである。(d)「あの人がそんなことをやるか」は、順接と低接の疑問上昇が13名中それぞれ5名に選ばれているが、2名は両方に○をつけている。順接あるいは低接の平坦を選んだ回答者は順接・低接の疑問上昇は選んでいない。(e)「誰がこんなことをやるか」も、かなり回答がばらついているが、(d)とは異なる音調を選んでいる傾向が見られるので、違う音調を使うことは予測されていると思われる(表5-2)。

「桃か」の(a)「ふーん、これが桃か」は、順接平坦以外の音調がほぼ同数で、回答にばらつきが見られることから、使い方が分からず、回答に迷ったのではないと思われる。

(b)「これが本当に桃か?」は、順接および低接の疑問上昇にそれぞれ半数程度の回答があった(7名、6名)。この設問で順接あるいは低接の平坦を選んでいる回答者も7名いたが、そのうち順接または低接の疑問上昇も選択しているのは2名であった。順接疑問上昇を選んでいる7名のうち、低接疑問上昇も選んでいる回答者は4名いた。低接の音調もふさわしいと答える傾向は、香川・岡山に近いと言えるかもしれない(表5-1)。

#### 5. 2. 5 全般的な傾向

日本語母語話者の場合と異なり、8割以上の回答者が選ぶようなケースはそれほど多くなく、回答にばらつきが見られた。最高でも10名で、13名のうち半数を超える7名か8名が選んでいれば比較的多いと考えるべきかもしれない。また、全体的に、留学生の方が日本語母語話者よりもより少ない選択をしていた。特に、複数回答のとき、平坦が落ちる傾向があるようである。

留学生13名のうち、10名が○をつけているものは、「やるね」(あいつなかなかやるね)の下降、「心配だな」(試験の結果が気になってひとりごとのように言う)の下降、「やるか」(自分で仕事を始める)の低接平坦であるが、いずれも日本語母語話者の回答者もほとんどが○をつけているものであり、大きな食い違いは見られなかった。

日本語母語話者が順接の平坦、疑問上昇、アクセント上昇の中の、複数の音調をふさわしいと答える場合のもの「桃だよ」(a)、「やるよ」(a)(b)(c)、「やるね」(a)(b)、「本当だね」(a)(b)、「先輩だな」については、同じ傾向で選ばれることはなく、どれか一つの音調は日本語母語話者に比べて選択した回答者の数が少ないようである。「やるね」(a)を除くと、全体的に平坦は少なそうである。

地域の影響に関しては、「やるね」の(b)、「桃か」(b)で、低接疑問上昇が比較的多いという傾向があり、この地域の日本語母語話者と似たような傾向を示したが、同じ「やるね」でも(a)では異なる回答傾向であった。今後、調査対象者の地域での在住の情報と合わせた、より詳細な調査、分析が必要である。

また、調査の前に尋ねた質問項目で、「ふだん文末音調の違いをまったく聞き分けていない」という回答者はゼロであった。学習経験がない留学生も「ふだん少し聞き分けている」としており、またその回答も他の留学生の傾向と大きく異なっていなかった。これは、文末音調の聞き取りに関

しては、日本で社会生活を送る中で、ある程度は身につくものとも考えられる。

終助詞や文末音調について勉強したり話を聞いたりしたことがあるかどうかという点に関しては、今回の調査では回答に差がでるほどの影響は認められなかった。どのようなことを教わったのかという内容については尋ねていないが、今後の詳しい分析のためには、追調査も必要と考えられる。

また、「よ」については、9名以上の回答者が選んだ音調項目が一つもなかった。実際、「よ」は「ね」「な」「か」よりも多くの音調を許容し、使われている。その実態を反映しているとも言えるが、「どんな音調でもよい」というわけではない。よく使われる終助詞であることを考えると、日本語教育の指導内容に取り入れる必要性があると考えられる。

## 6 まとめ及び今後の課題

終助詞「よ」「ね」「な」「か」の音調と機能の対応についての聴き取り調査を香川大学の留学生におこない、すでに実施した日本語母語話者（東京、岡山、広島、香川）の結果と比較した。日本語母語話者の場合、岡山、広島、香川では、東京で多く選択された音調のほかに、「ね」「な」「か」で低接音調も選ばれる傾向がみられたが、これは、この地域でこれらの終助詞が低接であることが深く関わっていると考えられる。また、一つの機能に対して一つの音調しか許されないわけではなく、何種類かの音調が選択されることもしばしば見られた。

いっぽう、留学生の場合は、日本語母語話者よりは少ない音調を選ぶ傾向にあり、そのため、ほとんど全員が選ぶようなケースがみられなかったが、最も選択数が多かった音調は、日本語母語話者も多く選んだものであった。しかし、「早くやろう」と仲間にながすすもりで言うとき、「やるよ」は、半数を超える留学生が上昇下降や下降を選択しており、日本語母語話者の回答と大きく異なっていた。また、一部には、地域の影響で選択されたと思われる音調もあった。

今回の設問の中に、相手の話に同意して、「本当だね。確かにそのとおりだ」と言うとき、という設定があるが、この「ね」は、文字化すれば句点がついているので終助詞であるが、実際の発話では、間投詞に近い。今後この設問を修正し、また留学生の終助詞に関する学習経験についての質問のしかたを検討したうえで、他の地域での調査・分析を続けたい。

本稿の、広島、岡山、香川での調査結果と東京での調査結果の比較・考察に関しては、近畿音声言語研究会3月月例会での報告資料をまとめなおしたものです。月例会で有益なコメントをくださった近畿音声言語研究会のメンバーの皆様に感謝いたします。

## 注

1. 轟木（1993）では、「疑問上昇」「強調上昇」としている。なお、川上（1963）の「第三種」および上村（1989）の「くだりのほり音調」は、本稿の「疑問上昇」の中に入れて考えている。
2. 服部（2002）では、落語資料にみられる「ね」「な」を計量的に調べているが、その際、「一次的には、ナやネが前拍に対して上昇して（相対的に高く）付いているか、前要素に対し上昇せずについているかを問題にする。また二次的に、「ネ・ナ」そのものの音調（ピッチ変動）を問題にする」とあり、音調の分類については本稿と似たような観点からの分析がされている。
3. 岡山、香川については、それぞれの地域で言語形成期を過ぎた話者のコメントがあった。広島については未確認。

## 参考文献

上村幸雄（1989）「日本語のイントネーション」『ことばの科学 3』むぎ書房，193-220.

- 川上 葵 (1963) 「文末などの上昇調について」『国語研究』16号, 25-46. (川上 葵 (1995) 『日本語アクセント論集』(汲古書院) 所収)
- 郡 史郎 (1990) 「大阪語の文末詞「か」の音調と機能：内省に基づく考察」『音声言語 IV』近畿音声言語研究会, 1-25.
- 轟木靖子 (1993) 「東京語の文末詞の音調と形容詞・動詞のアクセントについて」『STUDIUM 20』大阪外国語大学大学院研究室, 14-34.
- 轟木靖子 (1994) 「「な」「さ」「か」の音調と機能—東京語の場合—」『外国語・外国文学研究16』大阪外国語大学大学院修士会, 75-90.
- 轟木靖子 (1995) 「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報 第208号』日本音声学会, 1-8.
- 轟木靖子 (2004) 「終助詞の音調について」近畿音声言語研究会 3月月例会資料
- 服部 匡 (2002) 「ネとナの音調の計量的比較—落語資料から—」『同志社女子大学 学術研究年報第五十三巻 I』, 1-13.
- 藤原与一 (1982、1985、1986) 『方言文末詞<文末助詞>の研究 (上)(中)(下)』春陽堂.
- 村中淑子・郡史郎 (1990) 「文末詞「か」の音調と機能における大阪語と京都語の差」『方言音調の諸相—西日本(1)—』文部省重点領域研究「日本語音声」平成元年度研究成果報告書, 53-76.
- 吉沢典男 (1960) 「イントネーション」国立国語研究所『話しことばの文型(1)』秀英出版, 249-288.
- 和田 実 (1969) 「辞のアクセント」『国語研究 29』, 1-20.

本研究は平成16年度科学研究費補助金による研究 基盤研究(C)「終助詞の音調の分析と日本語教育への応用」(課題番号15520337) による研究成果の一部である。

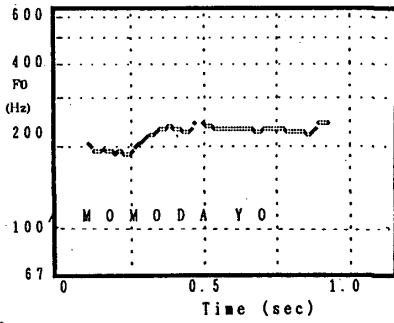


図1 「桃だよ」平坦

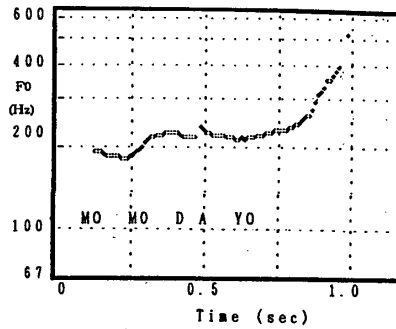


図2 「桃だよ」疑問上昇

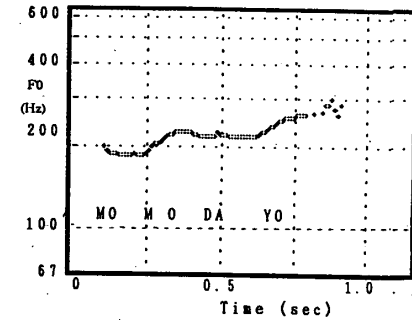


図3 「桃だよ」アクセント上昇

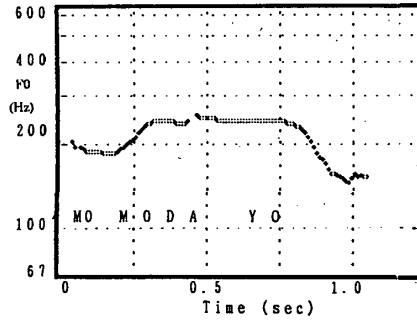


図4 「桃だよ」下降

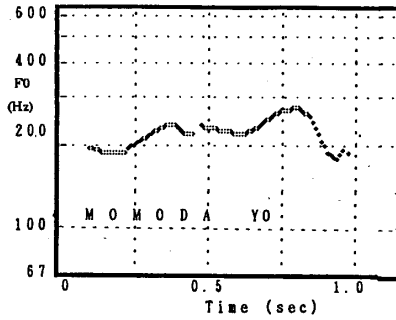


図5 「桃だよ」上昇下降

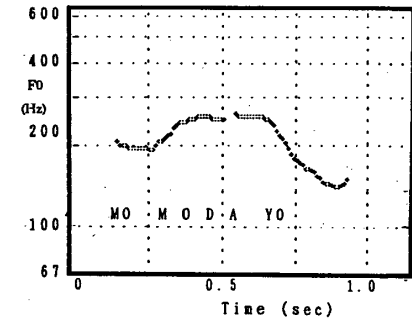


図6 「桃だよ」低接平坦

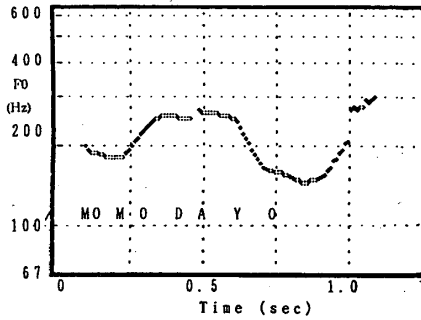


図7 「桃だよ」低接疑問上昇

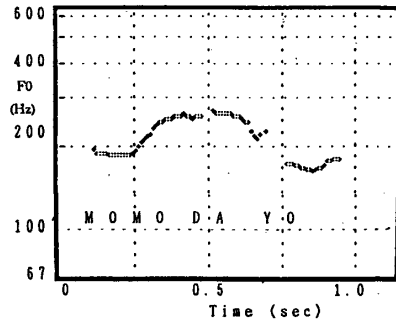


図8 「桃だよ」低接アクセント上昇

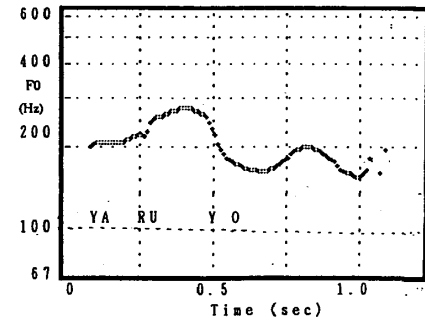


図9 「やるよ」低接上昇下降

使用ソフト「音声録聞見」(ディジタル) LPF=4.5kHz 10kHz、12ビットでサンプリング

表2-1 「桃だよ」

桃だよ		「あれ、何？」と尋ねた友人に教えるつもりで						「あれは梅ではなくて桃だ」と言うとき									
		平坦	疑上昇	ア上昇	下降	上下	L平坦	L疑上	Lア上	平坦	疑上昇	ア上昇	下降	上下	L平坦	L疑上	Lア上
KAGAWA	F 01	○		○			○					○				○	
KAGAWA	F 02	○		○			○					○				○	
KAGAWA	F 03	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
KAGAWA	F 04	○	○	○			○					○				○	
KAGAWA	F 05	○	○	○			○				○				○		
KAGAWA	F 06	○	○	○	○	○	○				○				○		
KAGAWA	F 07	○	○	○	○	○	○				○				○		
KAGAWA	F 08	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
OKAYAMA	F 01		○	○	○	○	○				○				○		
OKAYAMA	F 02		○	○	○	○	○				○				○		
OKAYAMA	M 01	○	○	○			○				○				○		
HIROSIMA	F 01	○	○		○		○				○				○		
HIROSIMA	F 02	○	○	○	○	○	○				○				○		
TOKYO	F 01	○	○	○	○	○	○				○				○		
TOKYO	F 02	○	○	○	○	○	○				○				○		
TOKYO	F 03	○	○	○			○				○				○		
TOKYO	F 04	○	○	○			○				○				○		
TOKYO	F 05			○			○				○						
TOKYO	F 06		○	○	○	○	○				○				○		
TOKYO	F 07	○	○	○	○	○	○				○				○		
TOKYO	M 01	○	○				○				○				○		
TOKYO	M 02	○	○	○	○	○	○				○				○		
内省	F 00	○	○	○	○	○	△				○				○		
CHINA	F 01	○		○	○	○					○				○		
CHINA	F 02	○	○	○							○				○		
CHINA	F 03		○	○	○		○				○				○		
CHINA	F 04		○				○				○				○		
CHINA	F 05			○							○						
CHINA	F 06			○	○						○						
CHINA	F 07		○				○				○						
CHINA	M 01	○		○			○				○				○		
CHINA	M 02						○				○				○		
CHINA	M 03		○								○				○		
CHINA	M 04		○								○				○		
KOREA	F 01	○		○	○						○				○		
KOREA	F 02	○	○	○	○		○				○				○		

表2-2-1 「やるよ」

やるよ		「私がやります」と答えるつもりで						仲間に「早くやろう」とうながすつもりで								
		平坦	疑上昇	下降	上下	L平坦	L疑上	L上下	平坦	疑上昇	下降	上下	L平坦	L疑上	L上下	
KAGAWA	F 01	○									○	○				
KAGAWA	F 02					○					○	○				
KAGAWA	F 03	○	○	○		○	○				○	○			○	
KAGAWA	F 04					○	○				○	○			○	○
KAGAWA	F 05		○			○					○	○	○	○		
KAGAWA	F 06	○	○			○					○	○				
KAGAWA	F 07	○	○	○		○					○	○			○	
KAGAWA	F 08	○	○			○					○	○	○			
OKAYAMA	F 01		○		○	○	○				○	○	○			
OKAYAMA	F 02		○		○	○	○				○	○	○			
OKAYAMA	M 01		○													
HIROSIMA	F 01	○	○				○								○	
HIROSIMA	F 02	○	○	○		○	○				○	○			○	
TOKYO	F 01	○	○										○			
TOKYO	F 02	○	○	○		○					○	○			○	
TOKYO	F 03	○	○	○		○					○	○			○	
TOKYO	F 04	○	○	○							○	○	○			
TOKYO	F 05	○									○	○	○			
TOKYO	F 06										○	○				
TOKYO	F 07	○	○	○							○	○	○		○	
TOKYO	M 01	○									○	○				
TOKYO	M 02	○		○							○	○			○	○
内省	F 00	○	○			○					○	○				
CHINA	F 01			○		○							○		○	
CHINA	F 02	○	○								○	○	○	○		
CHINA	F 03	○	○	○		○					○	○				
CHINA	F 04		○			○									○	
CHINA	F 05	○										○	○	○		
CHINA	F 06										○					
CHINA	F 07										○		○	○		
CHINA	M 01	○											○	○		
CHINA	M 02	○		○		○					○			○		
CHINA	M 03										○			○		
CHINA	M 04	○									○			○		
KOREA	F 01	○		○							○	○	○			
KOREA	F 02	○	○			○					○	○	○		○	○





表4-2 「心配だな」

心配だな		自分が受けた試験の結果が気になってひとり言のように言う					後輩のことが気になって、自分の同期の仲間に言う										
		平坦	疑上昇	ア上昇	下降	上下	L平坦	L疑上	Lア上	平坦	疑上昇	ア上昇	下降	上下	L平坦	L疑上	Lア上
KAGAWA	F 01	○			○	○						○	○	○			
KAGAWA	F 02				○	○						○	○	○			
KAGAWA	F 03	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○		○
KAGAWA	F 04		○		○	○						○	○	○			
KAGAWA	F 05		○	○	○	○						○	○	○			
KAGAWA	F 06	○	○		○	○						○	○	○	○		○
KAGAWA	F 07	○	○	○	○	○			○			○	○	○	○		○
KAGAWA	F 08	○	○	○	○	○						○	○	○	○		○
OKAYAMA	F 01	○	○		○	○						○	○	○	○		○
OKAYAMA	F 02	○			○	○						○	○	○			
OKAYAMA	M 01				○	○						○	○	○			
HIROSIMA	F 01		○		○	○						○	○	○	○		
HIROSIMA	F 02	○			○	○	○					○	○	○	○	○	
TOKYO	F 01		○		○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 02	○		○	○	○						○	○	○	○		○
TOKYO	F 03	○			○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 04			○	○	○						○	○	○	○		○
TOKYO	F 05		○		○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 06				○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 07	○	○	○	○	○			○			○	○	○	○		○
TOKYO	M 01	○		○	○	○						○	○	○	○		
TOKYO	M 02				○	○						○	○	○	○		○
TOKYO	M 03	○			○	○						○	○	○	○		
TOKYO	M 04	○			○	○						○	○	○	○		
TOKYO	M 05	○			○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 08	○	○		○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 09	○		○	○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 10	○			○	○						○	○	○	○		○
TOKYO	F 11	○	○		○	○						○	○	○	○		
TOKYO	F 12	○	○	○	○	○			○			○	○	○	○		
TOKYO	F 13				○	○						○	○	○	○		
内省	F 00	○		○	○	○						○	○	○	○		
CHINA	F 01			○	○	○						○	○	○	○		
CHINA	F 02	○	○		○	○						○	○	○	○		
CHINA	F 03	○			○	○						○	○	○	○		○
CHINA	F 04				○	○						○	○	○	○		○
CHINA	F 05				○	○						○	○	○	○		
CHINA	F 06	○			○	○						○	○	○	○		
CHINA	F 07		○		○	○			○			○	○	○	○		
CHINA	M 01	○	○		○	○						○	○	○	○		○
CHINA	M 02				○	○						○	○	○	○		
CHINA	M 03				○	○						○	○	○	○		
CHINA	M 04	○		○	○	○						○	○	○	○		○
KOREA	F 01				○	○						○	○	○	○		
KOREA	F 02	○	○		○	○						○	○	○	○		○

表5-1 「桃か」

桃か		「ふーん、これが桃か」				「これが本当に桃か？」と尋ねる							
		平坦	疑上昇	L平坦	L疑上	平坦	疑上昇	L平坦	L疑上				
KAGAWA	F 01	○							○				○
KAGAWA	F 02	○			○				○				○
KAGAWA	F 03	○			○				○				○
KAGAWA	F 04		○		○				○				○
KAGAWA	F 05				○				○				○
KAGAWA	F 06	○			○				○				○
KAGAWA	F 07	○			○				○				○
KAGAWA	F 08				○				○				○
OKAYAMA	F 01	○	○		○				○				○
OKAYAMA	F 02				○				○				○
OKAYAMA	M 01				○				○				○
HIROSIMA	F 01	○			○				○				○
HIROSIMA	F 02	○	○		○				○				○
TOKYO	F 01	○			○				○				○
TOKYO	F 02				○				○				○
TOKYO	F 03				○				○				○
TOKYO	F 04				○				○				○
TOKYO	F 05		○		○				○				○
TOKYO	F 06	○	○		○				○				○
TOKYO	F 07		○		○				○				○
TOKYO	M 01	○			○				○				○
TOKYO	M 02	○			○				○				○
TOKYO	M 03	○			○				○				○
TOKYO	M 04	○			○				○				○
TOKYO	M 05	○	○		○				○				○
TOKYO	F 08	○			○				○				○
TOKYO	F 09	○	○		○				○				○
TOKYO	F 10	○			○				○				○
TOKYO	F 11	○			○				○				○
TOKYO	F 12		○		○				○				○
TOKYO	F 13	○			○				○				○
内省	F 00	○			○				○				○
CHINA	F 01		○		○				○				○
CHINA	F 02				○				○				○
CHINA	F 03		○		○				○				○
CHINA	F 04				○				○				○
CHINA	F 05	○			○				○				○
CHINA	F 06				○				○				○
CHINA	F 07		○		○				○				○
CHINA	M 01				○				○				○
CHINA	M 02				○				○				○
CHINA	M 03	○			○				○				○
CHINA	M 04		○		○				○				○
KOREA	F 01				○				○				○
KOREA	F 02		○		○				○				○



表5-2 「やるか」

やるか		自分で仕事を始める				仲間に声をかける				「彼もそこまでやるか」				「あの人がそんなことやるか」				「誰がこんなことやるか」			
		平坦	疑上昇	L平坦	L疑上	平坦	疑上昇	L平坦	L疑上	平坦	疑上昇	L平坦	L疑上	平坦	疑上昇	L平坦	L疑上	平坦	疑上昇	L平坦	L疑上
KAGAWA	F 01	○				○	○	○	○	○		○			○						○
KAGAWA	F 02			○			○	○	○				○		○						○
KAGAWA	F 03	○		○		○	○	○	○			○	○	○			○			○	
KAGAWA	F 04			○			○	○	○			○		○						○	
KAGAWA	F 05			○			○	○	○	○	○		○	○						○	○
KAGAWA	F 06			○			○	○	○	○			○	○					○	○	○
KAGAWA	F 07	○		○		○	○	○	○			○	○	○					○	○	○
KAGAWA	F 08			○		○	○	○	○	○			○	○			○			○	○
OKAYAMA	F 01	○		○			○		○	○			○	○	○				○	○	
OKAYAMA	F 02			○			○							○						○	
OKAYAMA	M 01			○		○							○	○	○					○	○
HIROSIMA	F 01			○		○							○	○	○					○	○
HIROSIMA	F 02	○		○			○	○	○				○	○	○			○		○	○
TOKYO	F 01			○		○	○			○			○	○	○					○	○
TOKYO	F 02			○	○	○			○	○			○	○	○			○	○	○	
TOKYO	F 03			○			○	○		○			○		○					○	○
TOKYO	F 04			○	○			○	○				○	○	○					○	○
TOKYO	F 05			○		○							○	○					○	○	
TOKYO	F 06			○			○			○			○	○						○	○
TOKYO	F 07			○			○	○		○			○	○						○	○
TOKYO	M 01			○		○	○			○			○	○						○	○
TOKYO	M 02	○				○	○		○	○			○	○	○				○	○	
TOKYO	M 03			○			○						○	○	○					○	○
TOKYO	M 04			○			○						○	○	○					○	○
TOKYO	M 05	○		○		○	○		○	○			○	○	○					○	○
TOKYO	F 08			○			○			○			○	○	○					○	○
TOKYO	F 09			○			○			○			○	○	○					○	○
TOKYO	F 10			○			○			○			○	○	○					○	○
TOKYO	F 11			○		○		○	○	○			○	○	○				○	○	○
TOKYO	F 12			○			○	○	○		○			○	○	○				○	○
TOKYO	F 13			○			○	○	○					○	○	○				○	○
内省	F 00			○			○	○		○			○	○	○					○	○
CHINA	F 01			○		○				○			○	○					○	○	
CHINA	F 02			○			○			○			○	○	○					○	○
CHINA	F 03			○			○			○			○	○	○					○	○
CHINA	F 04			○		○				○			○	○	○					○	○
CHINA	F 05			○			○			○			○	○	○				○	○	
CHINA	F 06			○			○			○			○	○	○				○	○	
CHINA	F 07			○			○			○			○	○	○					○	○
CHINA	M 01			○			○			○			○	○	○					○	○
CHINA	M 02			○		○				○			○	○	○					○	○
CHINA	M 03			○			○			○			○	○	○					○	○
CHINA	M 04			○			○			○			○	○	○					○	○
KOREA	F 01			○			○			○			○	○	○					○	○
KOREA	F 02			○			○			○			○	○	○					○	○